

---

# 守りたいもの、諦めた未来

ぐり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

守りたいもの、諦めた未来

### 【Nコード】

N2295X

### 【作者名】

ぐり

### 【あらすじ】

シエラール王国の王都チクルに暮らすティアは病弱な弟を養ったため、自分の身の危険も顧みず、その手を汚れた仕事に染めていた。ある日、ティアの元に、依頼主の正体もわからない仕事が入る。今までに無い額の報酬は、弟の薬代としては十分な額で――。

## 懺悔

シェラール王国の王都チクルを静かに流れるラル河。

国を潤す母なる河を渡る橋の下に、ティアが造った墓がある。草が生い茂り、人が訪れる事などほとんど無いこの場所にひっそりと隠されるように造られた墓の前で、ティアは今日も祈っていた。

自分が奪った命がどうか安らかに眠れますように、と。

ティアを包むのは、河を流れる水の音と風に撫でられ微かに音を立てる周囲の草のさざめきのみ。周囲はすっかり夜の闇に覆われていて、ティアの頭上にある橋の上を誰かが通りそうな気配もない。

私の声は彼らの眠りをさまたげるだけかもしれない。誰が自分を殺した相手の祈りを欲するものか

ここへ祈りに来る度にそんな思いに駆られるけれども、それでも祈らずにはいられなくて、ティアは新月が暗闇を運んで来るたびに花と祈りを捧げにこの場所へ来てしまう。祈りを捧げるべき数多くの人の亡骸はそれぞれ別々の場所に埋葬されていて、ここにあるの

はティアが自分で造った中身の無い簡素な墓だけだというのに。

墓の前にはティアが持ってきた花が置かれている。

セラムと呼ばれるこの白い花は、水を遣ることが無くとも当分の間枯れずに咲き続ける不思議な花だ。ティアが死者にこの花を捧げるようになったのは、遠い記憶の向こうで誰かがこの花を好きだと言っていた気がしたからだ。それを言っていたのが誰なのか、そんな話をしたのがいつの事だったのかも覚えていないが、ティアが今の仕事を始めるよりも随分前の事だったような気がする。

## 仕事

今の仕事      暗殺業に手を染めるより前は、自分にも幸せな時があった。

「・・・あなたたちに捧げる花くらいは、汚れていなかった頃の自分が選んだものにしたい。だけど・・・。そんなことしたって誰も喜ばないよね。私が憎いよね。」

新月の下の暗闇の中、ほんの僅かにティアの姿が浮かび上がる。  
あと少しで17の誕生日を迎える少女の、細身のしなやかな体は少しだけ丸みを帯びており、背中まで伸びた淡い金色の髪の毛は風でさらさらと揺れている。  
ほっそりとした顔の中心で輝いているだろう二つの瞳は、今は閉じられていて見ることができないが、それもティアの美しさを損なう理由にはなっていない。

形の良い唇からこぼれ落ちたその囁きは誰の耳に入る事もなかった。

ティアが今日命を奪った相手はそろそろ壮年に入ろうかという体格の良い男だった。

来月行われるという娘の結婚式の話、物売りの振りをして近づいた見ず知らずのティアにまで嬉しそうに話していた幸せそうな表情が印象に残っている。

驚きに見開かれた眼。

何故、という驚愕の表情。

痛みにうずくまる姿。

一刻の苦しみ後に動かなくなる、体。

彼の娘は突然命を奪われて結婚式に出席する事が出来なくなった父親を想って悲しみに暮れ、その命を奪った人物をこの先もずっと怨み続けるだろう。

誰を恨めばよいかわからないまま、恨み続けるのだ。

こんな光景は今までに何度も目にしてきた。  
ティアが奪った生命の数と同じだけ、ティアが生み出した悲しみが  
存在する。

彼らの悲しみに対して罪を償う事もできず、彼らの怒りをこの身  
に受けることもできない自分はどれだけ卑怯な存在なのか。

祈ることを続けているのは罪悪感を少しでも減らしたいという心  
の奥底の本音が知らず知らずのうちに行動に現れているからなのか  
もしれない。この生き方を選んだ事に後悔はしていないが、拭い去  
る事のできない罪悪感だけはいつになっても慣れる事がない。

いや、そうじゃない。この心地の悪さはそんなものじゃない。

結局は罪悪感という気持ちをも、自分の心を守るために利用してい  
るだけなのだ。罪悪感を抱く事で、彼らの命を何のためらいもなく  
奪った自分がまだ人間らしい心を持っていると思いたいだけなのだ。  
本当にそんな感情を持っているのだったら、人を平気で殺すことな  
んでできるはずがない。

現に今日だって人を一人殺してきたばかりじゃないの。

幾筋もの涙の跡が残る頬にまた一粒涙が零れたが、それを拭うこ  
ともせず、ティアはただ祈り続けた。

何が悲しいのか誰に対しての涙なのか。自分でもまだよくわからない。



## 守りたいもの

「姉さん、お帰り。今日は遅かったんだね」

家に帰り着いたのは随分と夜遅くだったのに、弟のキールはまだ起きていて、食事を用意して待っていた。

「ただいまキール。今日はね、ほら・・・ラルゴさんにこき使われて。ラルゴさん、私相手だと容赦がないんだから、もう。『ティアなら出来る』の一言だけで、何でも私にさせようとするの。今日だってラルゴさんが汚しまくった床を私がひたすら磨いたの。ひどくない？」

普段のティアは、近所に住む10歳上のラルゴという男が営む食堂で働いている。5年前に流行り病で両親を亡くしたティアとキールの姉弟がいままで生きてこれたもの、昔から二人をよく知るラルゴが、親身になって2人の生活を支えてくれたからだということを、ティアもキールもよくわかっていた。

「ははっ。姉さんがそれだけラルゴさんに頼りにされてるんだよ。いいなあ、楽しそうじゃない。」

すっかりと冷めてしまった夕食のスープを火にかけながら、キールがティアをなだめるように言った。

「そう？・・・まったく、しょうがないよねえ。私が居ないとダメなんだもん、あのお店。私がいなかったらとても人様に出せる料理なんて作れないよ。あんなにおいしい料理を作る人が、どうしてもあんなに片付けられないのかしら。」

鍋から立ちはじめたおいしそうなスープの香りをかきながらティアがぼやくと、キールが笑った。ティアがぼやくのもキールがなだめるのもすっかり当たり前のことであり、今日も二人だけの家の中には穏やかな時間が流れていた。

「そんな事より、キールはこんな時間まで起きてて大丈夫なの？昨日まで寝込んでたのに、寝不足のせいでまた体調崩してベッドに逆戻りなんてことになったら笑えないんだからね。」

ティアより2つ年下の弟キールは、亡くなった母親に似て昔から体が丈夫ではない。15になった今でも月の半分はベッドの中で過

ごしているほどに、すぐに体調を崩してしまう。ティアも同年代の少女に比べれば華奢な方であるが、キールのようにすぐに寝込んでしまうことはあまりなく、大きな病気もこれまで経験していない。

「うん、大丈夫だと思う。昨日も熱自体はほとんど下がってたから。姉さんが疲れて帰るのに、食べ物の一つもないのはかわいそうだと思うってさ。」

「そっか、ありがと。」

弟の優しさに、さっきまでの重く暗い気持ちが少しだけ軽くなっていくのがわかる。

ラルゴの店で働かせてもらっているティアだが、月の収入は兄弟二人が生活するのが精一杯でキールを定期的に医師のもとへ通わせるほどの余裕は無い。

ティアが裏の仕事を始めたのも、弟を医者に診せる金を稼ぐ為だった。

ティアに裏の仕事を紹介したのは、ラルゴだった。ラルゴの店で

働き始めてしばらくして、幼いけれども聡かったティアは、表向きは町の食堂を営んでいるラルゴが、時々秘密の話をしていることに気づいた。頼み込んで頼み込んで、ラルゴはしぶしぶティアが裏の仕事にかかわることを了解した。

キールはティアの本当の仕事を知らない。いや、ティアが知らせていないのだ。

純粋な心を持ったこの弟にだけは、自分の汚い部分を見られたくない。それは、この仕事を始めた際、ラルゴにティアが出した唯一の条件だった。

「片付けはしておくから、キールは先に休んでいいよ。」

「そうしてくれると助かる、じゃあ先に寝るね。おやすみ。」

キールが眠りについた事を確認してから、ティアは大きく溜め息をついた。テーブルにうつ伏せになると途端にどっと疲れが押し寄せる。正直なところ食事をするような気分ではなかったが、まだ温かさが残るこの食事を残しては、心優しい弟はきっと私の事を心配するだろう。

温かいスープに少し硬くなったパン。

この仕事を済ませて帰ってきた後はいつも、普段ではごく当たり前の事をしている自分に違和感を感じずにはられない。いつものように食事をし、キールと話し、ベッドに入る。人の日常を奪った私がこうやって――。

いや、やめよう。ここはあの暗い橋の下じゃない。ここは、弟と暮らす私の家。

残りのスープを喉の奥へ無理やり流し込み、ティアは食器を片付けた。

## 初めての、仕事

一番初めは簡単な仕事だった。

「キールのためにどうしてもお金がいるの、何だっけるから」

そう言ったティアにラルゴが渋々紹介したのは、表通りに大きな屋敷を構える中年の商人に嫁いだ年若い妻からの依頼で、幼馴染の男との駆け落ちを助ける仕事だった。花売りに扮したティアが妻と幼馴染との手紙を幾度も運び、十分な計画を練ることができた二人は手に手を取り合って無事に国境を越えたと聞いた。

妻からの報酬の一部をティアに渡す時、「俺がむやみやたらと屋敷に出入りしちゃあ、おれ自身が浮気相手にされちまうからなあ、助かったよ」と言って、ラルゴはティアの頭を撫でてくれた。

ティアがもう少し大きくなると、ラルゴは表の市場に出せない品物の運搬をティアに任せるようになった。ラルゴ自身はティアがこの仕事にますます深く関わっていくことに、いい顔はしなかったが、キールの治療費にお金がかかることを姉弟以外で誰よりも知っていたのもまたラルゴであった。

小さな少女であるティアが、そのような仕事に携わっているとは誰も思わないらしく、ティア自身の要領の良さともあいまって、ティアは実に優秀な仕事人となった。そうやって仕事を重ねるうち、強盗の肩担ぎのような汚い仕事、遂には暗殺稼業にまで手を出すことになったのである。

暗殺には常に自分自身の身の危険が伴うものである。

ティアはキールのように病気を抱えているわけではないが、病弱な母から生まれたこともあって、体格は大柄でないどころか華奢で小柄なほうであるし、力も並みの女性よりも弱いくらいである。それでも今日までティアが無事に仕事を続けることができたのは、周囲の状況を的確に判断することができる頭の良さと冷静さ、身のこなしの素早さのおかげである。

ティアがこの仕事を始めたころから、ラルゴはティアに周囲の人間の観察方法や自分の身を守るための身のこなし方、そして武器としてのナイフの使い方を教えてくれた。

始めはうまく操れなかったナイフであったが、使い方の要領を覚えるとその後はよく手に馴染むようになった。ティアにとってナイフは相性のよい武器だったようである。ティアを上達させたのは、弟のために身も心も強くなりたい、強くなって治療費を稼ぎたいという思いだった。

事実、ティアがこの仕事で稼いだお金によって、キールの治療費は賄われていた。それでも、キールの病気はよくなる気配はなく、ティアが買う薬で病気の症状が緩和されている程度である。最近では昼間からベッドに臥せていることも多い。優しいキールが、男である自分が働かずにいることを気にしていて、ティアが家帰る頃には無理をして元気に振舞っていることにもティアは気付いていた。

もう二度と家族を失いたくない。心が無くなってしまいううなあんな思いはもうしたくない。

ティアは、帰宅して家のドアを開けるたびに不安になる。弟が居なくなつて、自分が一人になつてしまふのではないかと、そんな思いに囚われる。



## 真夜中のカウンターで

ティアが自分の生き方について憂いながら眠りについた夜半過ぎ。フードを目深にかぶった一人の男がラルゴの店のカウンターに静かに座った。

「お客さん、はじめてだね。何にするかい？」

グラスに入った水をその男に差し出しながら軽く問いかけたラルゴに、男は目を合わせることなく「暖かいゴラルクーを」と小さな声で返した。

ラルゴは男に背を向けて、ゴラルクーが入った樽の栓を少し開け、その琥珀色の液体を火にかけるために小鍋に移した。もう少し早い時間であれば常連の客で賑わっている店内も、さすがにこの時間には客のほとんどが引き上げている。カウンターに座るフードの男が店を訪れる少し前に、最後まで残っていた常連の一人がフラフラの足取りで帰路につき、店の入り口の鍵をそろそろ閉めようかとラルゴが思っていたところに現れたのが、この男である。

火にかけたゴラルクーからほんのりと甘いアルコールの香りが漂い始めた頃、それまで静かに座っていたフードの男が、小さな声でラルゴの背中に声をかけた。

「依頼を、したいのだが。」

ラルゴはすぐには返事をしなかった。

無言のまま、小鍋に入ったゴラルクーを陶器のグラスに注ぎ、カウターの男に差し出した。振り返ったラルゴの表情には、先ほどの店主としての愛想の良さは無い。フードの男は相変わらずラルゴの顔を見ようとはしなかったが、ラルゴが纏う空気が変わったことにはすぐに気づいた様子であった。

「で、内容は？」

普段、人が良いことで知られているラルゴからは想像もできないような冷静な声で、ラルゴは男に問いかけた。街の人々はおるか、ラルゴの裏の顔を知っているティアでさえ、ラルゴのこのような声は聞いたことがないだろう。

しかし、そのような冷え冷えとした空気もフードの男にとっては予想の範囲内であったようである。ラルゴから否定の言葉が出ないことを確認すると、本題を切り出した。

「ある人物を殺してほしい。簡単に殺せるような相手ではないのだが。・・・万が一失敗しても、足がつかねければかまわない。報酬はそちらの言い値を用意しよう。」

予想通りの依頼内容に、ラルゴは感情の無い声で「誰を殺すんだ」と問い返した。

## 真夜中のカウンターで（後書き）

ゴラルクーは、ブランデーのような蒸留酒で、シェラール王国では一般的な庶民のお酒です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2295x/>

---

守りたいもの、諦めた未来

2011年11月27日18時50分発行